

学 位 論 文 要 旨

氏 名 保岡 啓子 (印)

論 文 題 目

「Tracing six Japanese donor families' attitudes, 2002-2016」

(日本のドナー家族 6 例の追跡調査:2002-2016)

指導教授承認印

岩渕 和也



「Tracing six Japanese donor families' attitudes, 2002–2016」

(日本のドナーファミリー 6 例の追跡調査:2002-2016)

保岡 啓子

背景 :

臓器移植法改正から 6 年、約 7 倍に臓器提供数は増加したが、その総数は 375 例に留まり(2016/04/24)、依然として深刻な臓器不足に直面している。また、国内外からも、脳死からの臓器提供は日本人の心性や日本の文化的背景が臓器提供を阻む原因と捉えられている。しかしながら、実際に身内の臓器提供の決断をしたドナーの遺族に着目した研究は殆ど無く、臓器提供後のドナーの遺族の実態はベールに覆われたままである。本調査の目的は、臓器提供後の遺族の実態調査から臓器不足の一因を解き明かす手がかりを模索するものである。本論では、ドナーの意思表示の有無とドナーの遺族の臓器提供の評価の変容に焦点を当てた。

方法 :

2002 年から移植医療の当事者（移植医・レシピエント・ドナーの遺族）のインタビュー調査を始め、特にドナーの遺族 6 例に焦点を当てた(調査開始時の脳死からの臓器提供数 19 件)。調査対象の選定は日本移植者協議会主催の移植者スポーツ大会で、ドナーの遺族と海外レシピエントの通訳を務めることでファースト・コンタクトを試みた。また、調査対象者の選定基準は、身内の死後に臓器を提供した遺族と限定した(生体移植を除く)。臓器提供の経緯は、脳死（交通事故 4 例・病死 1 例）と心臓死（病死 1 例）であった。現在に至るまで追跡調査を継続し、14 年間（2002~2016 年）の遺族のナラティヴ・データから、悲嘆のプロセスの結果を纏め、臓器提供直後のドナーの遺族の悲嘆と 10 年以上経過した彼らの悲嘆の意味内容の変容の比較考察を行った。

結果 :

調査対象者 6 例のドナーの遺族のインタビュー調査から、ドナーの「臓器提供の意思表示」の有無と遺族の悲嘆のプロセスに想定外の変化が 5 例(83%)に生じていた。臓器提供直後（2002 年）、ドナーの「臓器提供の意思表示」が有った遺族 3 例(50%)は臓器提供を受容し、臓器提供をしたことが遺族の悲嘆軽減要因となっていた。一方、ドナーの「臓器提供の意思表示」が無かった遺族 3 例(50%)は臓器提供を後悔し、家族の付度で臓器提供をしたことが遺族の悲嘆増幅要因となっていた。約 10 年後（2014 ~2016 年）の追跡調査では、①ドナーの「臓器提供の意思表示」が有り、臓器提供は

「Gift of Life」と評価する遺族が1例(17%)、②ドナーの「臓器提供の意思表示」は有ったが、臓器提供を後悔している遺族が2例(33%)。③ドナーの「臓器提供の意思表示」が無く、臓器提供を後悔していた遺族3例(50%)全てが、10年以上に及ぶ様々な悲嘆のプロセスを経て、臓器提供を「結果としてのGift of Life」と受容していた。

結論：

本研究の結果、ドナーの「臓器提供の意思表示」の有無が遺族に臓器提供の決断を促し、臓器提供直後の悲嘆を軽減するが、長期的効力は認められなかつた。ドナーの「臓器提供の意思表示」以上に、10年という時間を共有した遺族たちが帰属するコミュニティの「移植医療への関心・正しい知識と理解」が長期的には遺族の悲嘆を和らげる要因となっていた。これらの知見を踏まえた更なる調査が必要であり、ドナーの遺族のグリーフ・ケアのみならず、今後の移植医療の進展、ひいては臓器提供の増加に寄与する可能性がある。